

## 二宮町立一色小学校

研究テーマ：9年間を見通した共通性と一貫性のある指導・支援を通した、  
「学びに向かう力」の醸成と資質・能力を育む指導のあり方(3年次)

### 1 実践の目的

二宮町では、令和5年4月より町内すべての学校が1つの施設分離型小中一貫教育校『にのみや学園』となった。学園の開校に向けて、にのみや学園の教職員全員の願いや想いを紡ぎ、教育目標を次の通り定めた。

『認め合い、高め合う、二宮の子』

この教育目標を実現するために、子ども同士の学び合いや話し合いを中心とした授業づくりに学園全体で共通性と一貫性をもって取り組んでいる。学級づくりの基盤や学習の進め方をそろえることで、子どもたちが安心して学んだり、進級したりできるようにするとともに、9年間を見通して子どもたちに必要な資質・能力の育成を図ることができると思う。

子どもたちに育みたい資質・能力を学園内で共通理解を図り、授業づくりを進めることを大事にしている。

二宮町で育みたい汎用的な資質・能力		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
①主体的に継続して勉強する	①必要な情報を集めて分析する	①多様な価値感の仲間を増やす
②多様な学びで知識を吸収する	②状況に応じて適切に判断する	②互いの違いを認めて高め合う
③知識を応用して上手に使う	③論理的で柔軟に思考する	③誇めずに自分の夢をかなえる
	④自分の考えを正しく伝える	

授業づくりでは、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」を意識し、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力・人間性を一体的に育てていくための授業改善を図ることを意識している。

特に、3年次となる令和5年度においては、学びに向かう力を高めていくために、以下の内容も研究の視点に加えて取り組んだ。

- 習得の授業における子どもの主体性
- 日常生活や学校生活との関連付け
- 学習活動や単元全体の目的意識の共有

### 2 実践の内容

#### (1) 研究体制

今年度も引き続き、教育力向上アドバイザー吉新一之氏（元川崎市立川崎小学校長）を講師に迎え、指導・助言を仰いでいる。今年度は、上学年下学年ブロックで各1クラス合計2クラスの授業発表する形から、全学年で授業をして参観し合う形に変更した。

また、学級の受容的な雰囲気づくりの醸成を目指し、教員の人権感覚を磨き、多様な児童の理解を深めるため、星山麻木氏（明星大学教育学部教育学科教授）を招聘し研修会を行った。

#### (2) 研究授業、研究協議の様子

1年生国語では、日頃から取り入れている全員挙手、ハンドサインなどを通して、伝え合う楽しさの基盤を作ることができた。

2年生国語では、児童一人ひとりが、友だちに相談したいことを提案し、みんなで考える経験ができた。

3年生保健体育では、「健康」について今の自分たちができることについて、思考ツールを取り入れて伝え合い学び合った。

4年生道徳では、自分たちで問題提起し

自分たちで話し合いを進めて考えを広めたり深めたりした。

5年生体育では、バスケットボールで、タブレットのジャムボードを活用した作戦会議に話し合いを取り入れた。作戦が実践につながらなかったときも子どもたち自身で振り返ることができた。

6年生社会では、教員は板書に徹し、めあてを提示するだけで、子どもたち同士で時間配分や話し合い、まとめまで進めることができた。

どの学年・教科においても、学校全体で発達段階と児童理解を共有して取り組むことで、教員、児童共に、楽しく学び合い深め合うことができること等を確認できた。

### 3 実践の成果

#### (1) 子どもの変容

- ・自然に子どもたちから話し合いをするようになり、話し合いを楽しむようになった。
- ・自主的に学習しようという姿勢が芽生えた。
- ・子ども同士で授業を進めることに慣れてきた。また、授業を楽しんでいるようだ。
- ・昨年度までの積み重ねがある分、話し合いの授業ができていた。
- ・話し合いなどの時間配分が自分たちでできるようになってきた。
- ・特別支援学級は今までは個別指導が多かったが、話し合い活動が得意な児童の活躍の場ができ、児童同士で話す、聞く活動ができるようになってきた。

#### (2) 教師の変容

- ・学級担任と特別支援学級担任が児童の様子を共有して、成長を共に喜び合い、手立てを考えるようになった。
- ・何かしら、話し合いの機会をもつように意

識して取り入れるようになった。

- ・山西小学校の取り組みを参観したことで、研究の理解が深まった。
- ・先生たちがリードすることがいい意味でなくなった。
- ・子どもたちに任せる場面と子どもの状況に合わせて、教員がしっかり関わる場面を意識するようになった。

### 4 今後の展開

「授業者がやりたい教科と単元」に挑戦し、吉新先生にご意見をいただく研究のやり方を取り入れたことで、教員たちの「やってみよう。やりたい。」という思いにつながる研究になった。研究も、誰かに言われてやると、教員がそちらに寄せてしまうが、「やりたい。」から入っていくことで、より積極的な授業改善につなげることができた。今後もこの形を継続したい。

また、学年でやってきたことや、めざすところを年度はじめに確認し、「今の児童の実態」に応じて目標ややり方も柔軟に変更したことで、子どもたちの話し合いの経験が積み重ねられ、話し合いスキルがより大きく伸びることにつながった。今後も年度当初の確認を大切にしていきたい。

一方で、一色小学校は教科担任制が進んでいるため、学年に関わる教員の中で、この学年では、「ここまでできるようにする。」と、ある程度共有しておく必要を感じた。特に、非常勤の教員と子どもの情報の共有が難しいので、学校研究で取り組んでいることを共有する機会を設けるなどの工夫で改善を図りたい。また、子どもが授業を進めることで、学習の進度を保つことが難しく感じることもある。深い学びを追究しつつ、授業の進度についても改善できるよう、研究を進めていきたい。